

題目：マーケットマイクロストラクチャー理論と実験経済学（仮）¹

発表者：小川一仁（京都大学大学院経済学研究科・修士課程）

小山友介（日本学術振興会特別研究員・京都産業大学客員研究員）

小田宗兵衛秀典（京都産業大学）

本ポスターセッションでは Spulber(1999)に基づいた、実物市場におけるマーケットマイクロストラクチャー理論（以下 MMS 理論）を実験経済学的に検証した結果を報告する。具体的には MMS 理論において、price making という最も重要な役割を果たしている独占的仲介業者 (intermediary, middleman) の行動原理を被験者が実際に行うかどうかを検討した。

理論的には独占的仲介業者は需要と供給を一致させるという制約の下で利潤が最大になる買値と売値を選択する。しかし今回の実験（2002 年 1 月末から 2 月末にかけて京都産業大学において実施された）では、被験者の中で理論に基づいた行動を行った被験者はほとんどいなかった。被験者たちの多くは「1．当初は利潤をあげることが出来る価格を探索するが、適当な利潤を上げられる価格設定を見つけたとたんそれで満足し、他の価格設定をほとんど行わないと言う、サイモンの満足化原理に基づいた行動をとる」か、「2．高い利潤をあげることの出来る価格設定を見つけたとしても、その結果に固着せず、ひたすら探索を続けるか」のどちらかに主に分類される。このように MMS 理論の仲介業者は重要な役割を果たしているが、人間が実際に行うことは難しい。それは仲介業者が全ての知識を持っていて利潤を最大化するという設定のためであろう（本実験では被験者に対して需要・供給の情報を与えなかった）。

なお、本研究は今後も継続して行われる予定で、今回は主に途中経過を報告するものである。仲介業者の実験を行い、人間がどのような意思決定を行うか見定めた後に最終的に行うべき実験は仲介業者と買い手、売り手を全て人間が行う市場である。この実験を行って、以上のような理論通りには行かない人間の仲介業者が導入されることで、売り手と買い手がうまく出会う可能性が少ない市場でどのような利点をもたらすかを検討する必要がある。

¹ 本研究は、京都産業大学大学院経済学研究科が私立大学学術研究高度化推進事業「オープン・リサーチ・センター」（2001 年度-2005 年度）として推進するプロジェクト『実験経済学：経済学教育の新しい方法と、それによる経済学教育の社会的効果の研究』（<http://www.kyoto-su.ac.jp/project/orc/>）の共同研究の成果の一部である。